不定期連載
ムジカノーヴァ
子ども音楽塾

第7回 モーツァルトが弾いたピアノの鍵盤は、今と違った!?

文：岳本恭治
イラスト＆鍵盤図：駿高泰子

さあ、ピアノの前に座り、リラックスして、肩の力をゆるめ、姿勢をよくしてください。うまくできたら、真ん中のドと、その1オクターブ上のドを同時に弾いてみましょう。このときの指と指の間の開き具合をよーく感じて、しっかり覚えておいてください。次に左ページの鍵盤図で、同じように1オクターブ離れたドとドの上に指を置いてみてください。

どうですか？　指の開き具合が違うことに、気づきましたか。

おそらく鍵盤図の1オクターブのほうが、実際のピアノで弾いたときより、少し狭く感じたのではないでしょうか。

実は、モーツァルトが生きていたころのピアノは、1オクターブが現代のピアノの7度（ドからその上のシまで）の広がりとほぼ同じだったのです。楽器にもよりますが、その差はだいたい5〜10ミリ未満でした。あんまり変わらないと思ったかもしれませんが、わずか1ミリ短いだけでずいぶん楽に弾けるようになるパッセージもあれば、反対に1ミリ長いだけで弾きにくくなるパッセージも山ほどあるのです。それほどピアノの鍵盤上での1ミリは、演奏する人にとって大きな差に感じられる長さなのです。

また、黒鍵より手前に長く伸びた白鍵部分の長さ（鍵盤図のⒶの部分）が、現代のピアノより1センチほど短かったので、白鍵から黒鍵までの距離がだいぶ近く感じられると思います。さらに、鍵盤図では体験できませんが、鍵盤の深さも、現代のピアノとかなり違っていました。現代のピアノは、鍵盤を一番下まできちんと押し下げるとほぼ10ミリありますが、モーツァルト時代のピアノは、深くても7〜8ミリ、浅いものでは5ミリぐらいのピアノもありました。

チェルニーの練習曲には、4や5の指をたくさん使う難しい曲がいっぱいありますね。チェルニーは、モーツァルトが35歳で亡くなった年に生まれた人ですが、チェルニーが練習曲を書き始めてからしばらくは、ピアノの鍵盤の深さはモーツァルトの時代のままでした。深さも1ミリ浅くなるだけで、楽々弾けるようになるパッセージがいっぱいあります。ということは、昔のピアノは2〜3ミリも浅かったのですから、今よりチェルニーの練習曲も簡単に感じられたはずです。

鍵盤が現代のサイズになったのは、19世紀後半になってからです。ショパンのピアノもほっそりとした鍵盤でした。

突然ですが、虫歯の穴を舌の先で触ったことはありますか？　ちゃんと歯磨きしているから、虫歯なんてない!?　ごめんなさい!!　舌で触るとすごく大きく感じられた穴が、鏡で見ると、それほどでもなかった、ということがよくあります。それと同じで、指先も舌の先のように敏感に大きさを感じ取るので、ピアノを作ったり、調律師さんが弾きやすくなるように調整したりするときには、0.1ミリ単位で作業をしています。

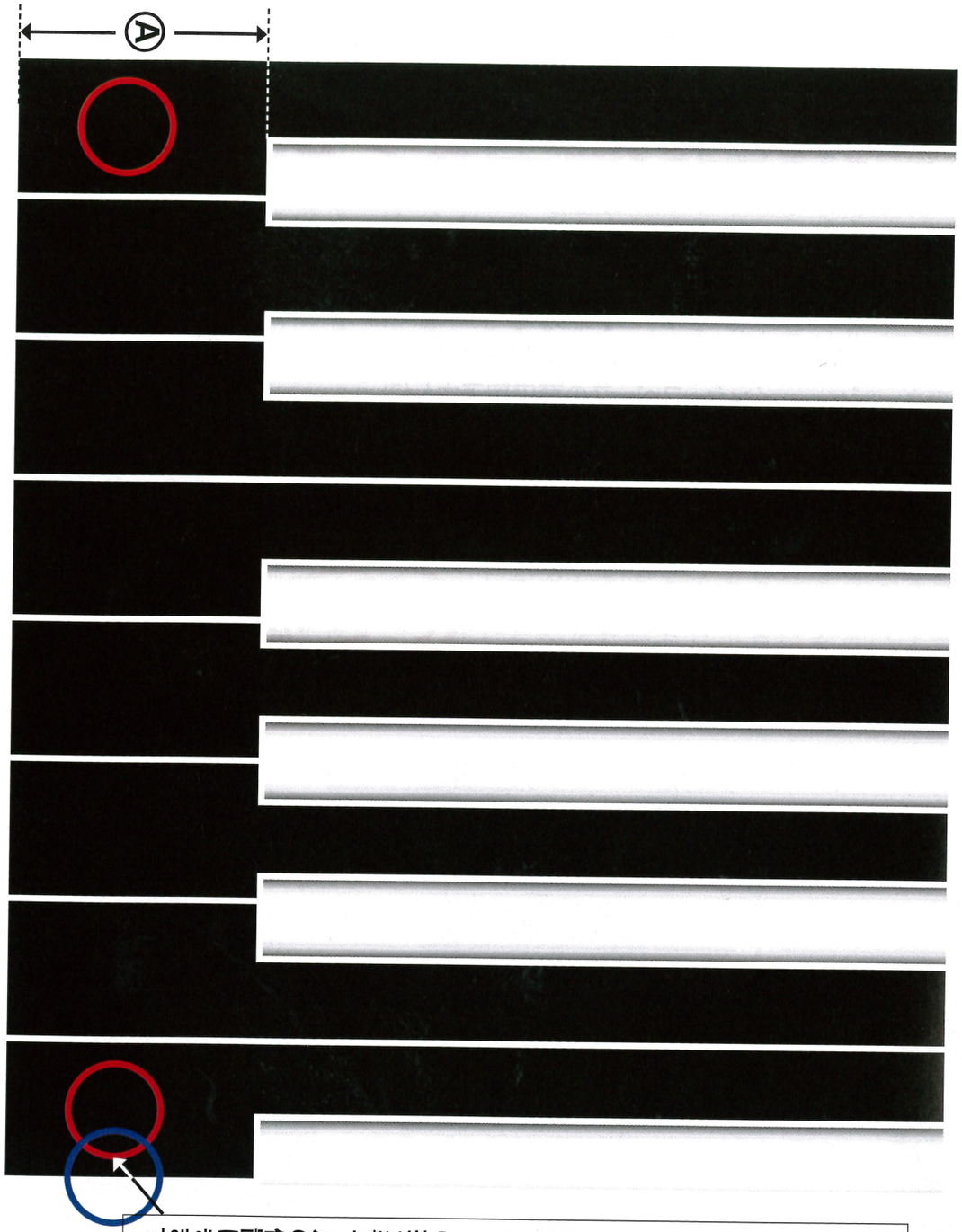
モーツァルトは当然、今のピアノを知らないわけですから、彼の曲を弾くとき、弾きにくく感じるところがあっても、不思議ではありませんね。

現代のピアノでモーツァルトの曲を弾くときには、狭く、浅い鍵盤のピアノで作られた曲だということを想像して、

- ×指を高く上げてから鍵盤に下ろす。
- ×手や指に余分な力を入れる。
- ×弾いた後、下りていた鍵盤を指の力を抜くことで自然に上げるのではなく、指の筋力で上げる。

といったことをしないように注意しながら演奏しましょう。現代のピアノは鍵盤が深いので、腕の重さをうまく使って鍵盤を押すように心がけてください。これを守れば、モーツァルトが喜んで、皆さんのピアノがもっともっと上手になるように、きっと応援してくれますよ！

モーツァルトの時代のピアノは、現代のピアノと黒鍵と白鍵の色が逆でした。モーツァルトの時代は、黒鍵には牛の骨が使われていたので白色、白鍵には黒檀という黒い木が張られていたので黒色だったのです。



現代のピアノでドレミファソラシドを弾くと、5の指が真ん中の位置にきます。

牛の骨が使われていたので白色、黒檀は牛の骨が使われていたので黒色だったのです。